

鏡浦今昔物語 小泉八雲とわがふるさと

24期 徳田完二

先のゴールデンウィーク、十数年ぶりに里帰りをした。わたしのふるさは隠岐諸島の島前にある海士町という小さな町である。このたびの帰省の主たる目的は、ずっと空き家のまま放置していた生家がどうなっているかを確かめることで、それに関しては色々あったのだが、その話題については別の機会に譲ろう。ここでは、小泉八雲とわがふるさとの関わりについて紹介してみたい。

わたしの生家は寝泊まりできる状態ではないので、このたびの帰省にあたっては菱浦という集落にある民宿に泊まった。菱浦は海士町の中心地で、島前の三島に囲まれた内海にあり、隠岐諸島と本土を結ぶ連絡船の寄港地になっている。実は、八雲はこの菱浦を夫人同伴で訪れているのだ。明治二十五年のことである。八雲は菱浦の海をとて気に入り、それを「鏡浦」と名づけたとされる。静かな海面が鏡のように見えたからであろう(写真1)。



写真1 現在の菱浦港

地元では八雲の来訪をとて名誉に思ったと見え、さまざまな記念物を港の一角に作っている。このたびあらためてそれらを見てまわった。

まず、八雲が来訪した事実を示した碑(写真2)と八雲夫妻の銅像(写真3)がある。また、「八雲来島百年記念愛蘭土(アイルランド)大使友好碑」(写真4)がある。さらに、八雲が菱浦湾を鏡浦と名づけたことにちなみ、八雲と海に関わる事柄を記した展示物がある(写真5)。

小泉 八雲（ラフカディオ ハーン）

古き良き日本を愛し、日本人として生きたハーンは明治25年8月に海士を訪れ、菱浦湾の畔にあった岡崎旅館（現在地）に滞在しました。水泳を楽しんだり、少女が機を織る姿を心ゆくまで眺めて過ごしたそうです。ハーンはこの菱浦湾を「鏡浦」と名付けたといわれています。母親の故郷ギリシャ・キシラ島、そしてハーンの生まれたレフカダ島、幼少期から思春期を過ごしたアイルランド、また渡米後に自然と文化の多大な感化を受けたカリブ海のマルティニーク島等、ハーンが歩んできた島々の風景を思い返しながら、この鏡のように静かな海を眺めていたかもしれません。

写真2 八雲の来島を記した碑



写真3 八雲夫妻の銅像



写真4 八雲の来島百年を記念して立てられたアイルランド大使の友好碑



写真5 八雲と海に関わる事柄を記した展示物の一部

菱浦と八雲との関わりを示すものはいずれでもない。鏡浦にちなんだ建造物として「鏡浦大橋」がある（写真6）。「大橋」と大仰な名前がついているが、ごくごく小さな橋であ

る。また、「鏡浦運動公園」なるものがある（写真 7）。これはただの広場で、わたしがそこを通りかかったときには、お年寄りたちがゲートボールの準備をしていた。さらに、「鏡ヶ浦ハイツ」と銘打った集合住宅も目にとまった（写真 8）。これは I ターンで海士町の移り住んだ人のためのものではないかと思う。これらに加え、菱浦の通りにある街灯の支柱にはどれも「小泉八雲」と書かれた小さなプレートが取り付けられていた（写真 9）。



写真 6 鏡浦大橋



写真 7 鏡浦運動公園



写真 8 鏡浦にちなんだ集合住宅



写真 9 街灯につけられた八雲の看板

八雲に関わるものはまだある。あるお店に地域通貨（特定の地域でのみ通用する“お金”）についてのポスターが貼られていたが、その通貨の名称は「ハーン Pay」なのだった（写真 10）。



写真 10 地域通貨「ハーン Pay」のポスター

これらのことから、菱浦の人がいかに、かつて八雲がこの地を訪れたことを大切に考えているかがうかがえる。

ところで菱浦は、隠岐と本土を結ぶ連絡船、隠岐汽船が生まれた地とされている。それを示す記念碑によれば、隠岐汽船が開設されたのは明治二十八年である（写真 11）。ということは、八雲が菱浦を訪れたのはまだ隠岐汽船が就航していない時期だったことになる。この事実は、このたびの帰省に際し、八雲に関わる碑と隠岐汽船に関わる碑を見比べることではじめて知った。

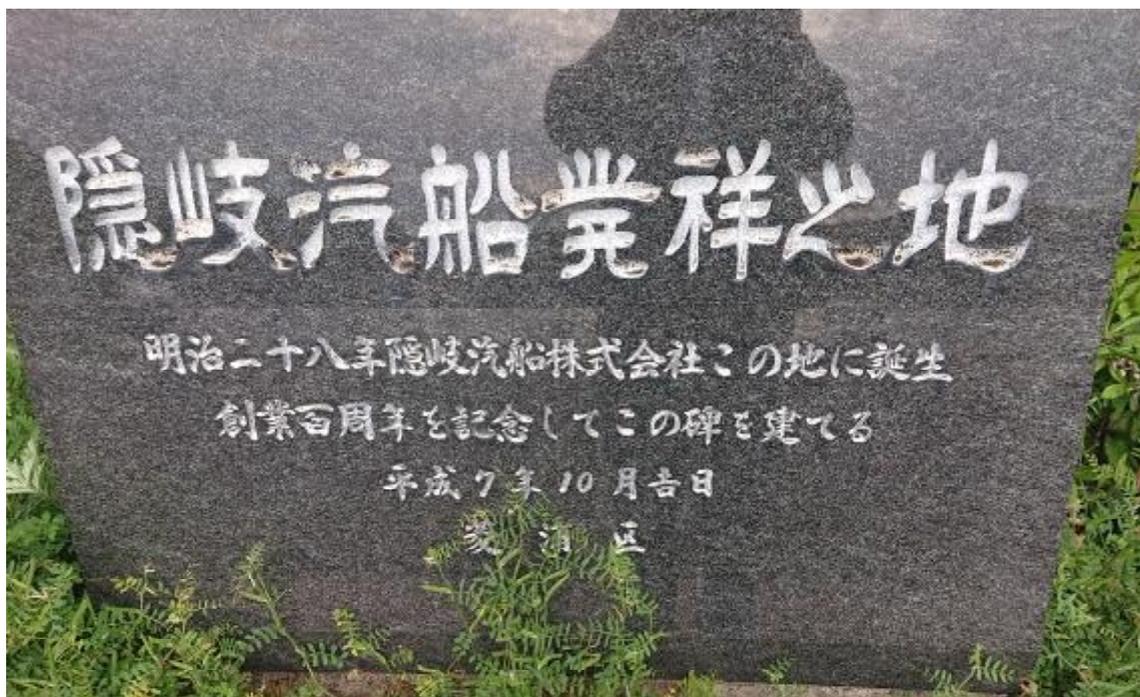


写真 11 隠岐汽船発祥の地の記念碑

八雲はいったいどんな船でどんな風にして日本海を渡ったのだろうか。波ひとつない「鏡浦」を眺めながら、そんな疑問が頭に浮かんだ。